

豊庄だより

第 755 号 2023 年 5 月 1 日



福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

<いつだって笑顔も涙もマスク越し>

コロナ禍をめぐる新聞にはいろいろな角度から記事が掲載されてきました。

そうした記事の中から、特に印象に残った千葉県の高校での取り組みの記事(2023年4月21日毎日新聞夕刊)を紹介し



大塚先生と岡村くん

介します。

3年前、その高校では入学式が行われた次の日から休校。1年生の担任で現代社会を教える大塚巧祐先生(41)は、生徒と会うことができず、顔も覚えられず、ただ学習課題を課しているだけの毎日で、寂しさを感じて、担任のクラスと現代社会の担当クラスの約120人から川柳で今の思いを綴ることを求めました。<制服のホコリを払い立夏です><5月でもまだ角残る教科書・ノート>など、約2カ月間で約300句が集まりました。そこには翻弄され続けた生徒たちの素直な思いがつつられていました。大塚先生は学校再開後も川柳の創作を続けました。コロナ禍は

その後も収まらず、3年後300人の卒業生が学び舎を後にする時が来ました。大塚先生は卒業式を前に改めて3年間を振り返る川柳を募りました。生徒会長の岡村くんは「みんなの思いを伝えたい」とこれらの川柳を選んで織り込んだ「卒業生の言葉」を卒業式で読み上げました。タイトルは、<本当のあたりまえって何だろう>(これも川柳です)。

<本当のあたりまえって何だろう>

入学式翌日からの休日。「地獄の始まり」でした。学校が再開しても、笑い声が聞こえない休み時間、友だちの素顔が見えないマスク姿。これが岡村君の高校生活の1年目でした。しかし、こうしたマスク生活は「私のあこがれていた高校生活から遠く離れていたものでした」と言いつつ、「決してくじけません」と続け、この時の川柳は、<友だちとラーメンを食べる日夢に見る><君と僕マスク二枚の距離遠し><日常はかけがえのないたからもの>と紹介しています。2年目になると、徐々に学校行事が再開されましたが、修学旅行は長崎3泊4日が、横浜1泊2日に。3年生のハイレベルな演劇が地域でも名物行事になっていたのですが、文化祭自体が中止。翌年の文化祭が最初で最後となり、岡村さんは「真田十勇士」の主演(猿飛佐助)を演じました。予約制でしたが、保護者の観劇もでき、「やっと青春らしいことができた」と述べました。岡村君は、「言葉」の最後に卒業生の川柳を3句選びました。<いつだって笑顔も涙もマスク越し><コロナで悪いことばっかじゃなかったよ><辛くても諦めなければ道開く>



さて、ここからは私の感想です。青春真ただ中の高校生活がこうした形で過ごすのは残念なことです。ここに登場する高校生のパワーと先生の柔軟な取り組みに圧倒されました。私が生徒あるいは教師だったら、どんなことをしたんだろうかと思いました。

もう一つ、文化祭の演劇についてです。この記事を読み、私が高校2年生の時、3年生を送る「予餞会」で、劇を作ったことを思い出しました。私は、演出・脚本・音楽の担当をし、劇の題は、「仮面ライダーとスーパーマン」。どちらが強いかを裁判をするという、今振り返ればどうでもよいつまらないテーマですが、クラスみんなで取り組んだ時間は、私の忘れることのできない青春の1ページでした。